

泉州岸和田の手繰網漁師

ないぞんねがいあげたてまつるこうじょう
「内存奉 願 上口上」 文久2年(1862) (塩崎家文書559)

岸和田の漁師は、遅くとも戦国期には紀州沿岸に手繰網で出漁していたとの由緒をもつ集団でした。1700年代初頭には手繰網から打瀬網（帆を使い風力を利用して網を引く底曳網）に漁法を進化させましたが、紀州では、少なくとも明治頃まで打瀬網は「手繰網」・「手繰」と呼ばれていました。

この古文書は、文久2年、小浦・津久野浦と更に南の比井浦の庄屋が連名で、藩の二分口役所（塩崎家が請け負っていた口前所の本部）に出した願書です。

毎年10月末頃～3月まで3か村に据浦するはずの岸和田漁師が、この年はまだ来ないので、例年どおり据浦するよう藩からの働きかけをお願いするという内容です。

- ・ 3か村の住民は、漁師の船宿となり、漁師に対して薪等の諸品を販売することで生計を立てたりしていたこと
 - ・ 漁があれば、「所之潤」つまり地元の利益にもなること
 - ・ 漁師の排泄物などを肥料として当てにしていたこと
- などが分かります。